大阪の医療と福祉を考える公開討論会

大阪府医師会は 10 月 14 日、当会館で「第 39 回大阪の医療と福祉を考える公開討論会」を開催し、約３００人の皆様にご参加いただきました。今回は「最期に『のぞむ』――救急医療の現場から」をテーマに、仮想事例を通して「人生の最終段階」を考えました。

当日は、上田崇順・毎日放送アナウンサーの司会で開会。第１部では、本会の加納康至副会長・鍬方安行理事および毎日放送アナウンサーの高井美紀さんが、仮想事例を通して意見を交わしました。第２部では映画試写会として、「８年越しの花嫁」（配給：松竹）を上映しました。

討論会に先立ち茂松茂人会長は「高齢化が進む社会では、『尊厳ある人生』を考えていく必要がある」とあいさつ。また、医師会として、府民の皆様が住み慣れた地域で安心・安全に暮らせるよう活動を続けるとし、ご支援・ご協力をお願いしました。

◆救急医療では患者の生命が最優先――鍬方理事

事例では、「患者の容体が明らかになるにつれ、家族間で望む治療内容が異なる」との設定で、「治療の差し控え」について考えました。ここでは、日本医師会や関係学会の考え方などを説明した上で、生命の維持が見通せれば、たとえ重い障害が残るとしても治療の差し控えはできないとの見解を出しました。また、「家族の意見だけで治療は決められない」と伝える一方で、患者さんが希望する「人生の最終段階での治療」を、かかりつけ医と共有し、なおかつ救急の医師がその事実を確認できれば、処置の選択にも幅ができるのではないか、との意見を述べました。

◆家族の思い「口に出して」共有――高井アナウンサー

事例を基に進行する中、高井アナは、①子どもを持つ親の立場、②高齢者の仲間入りをしたご両親を支える立場――で率直な気持ちを語りました。また、ご自身が購入した「エンディングノート」は白紙であると話し、「家族と話し合いながらページを埋めていきたい」「終末期は避けたい話題ではあるが、口に出して共有することが大事」と述べました。

◆かかりつけ医の役割ますます重要に――加納副会長

人生の最終段階においては、患者や家族に寄り添う「かかりつけ医」の役割が一層重要になるとの考えから、「医師会でも講習や研修会を更に充実させたい」との方針を示しました。その上で、「命の議論」に正しい答えはないが、「あえて人生の最終段階を考え、意識することが大切」と語りかけました。